

## 第3章 和辻哲郎—日本語と哲学の問題 ③

前おやさと研究所長  
井上 昭夫 Akio Inoue

## 第3節 日本語と日本思想

和辻哲郎が「日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいでよ」と言った日本語とは、漢語や明治初年の近代から噴出した欧米語の翻訳用語ではなく、古から日本という土着・土俗の風土・風習から生まれ、引き継がれてきた言葉を指している。たとえば天理教の原典である『おふでさき』は、明治維新初年度に書きはじめられ、日本語そのものの平仮名で、天保9年立教の後30年を経た72歳になる教祖中山みぎによって和歌で直筆された1,711首からなるやまとことばによる天啓書である。全歌首のなかで用いられている漢字は49種類にしかすぎない。やまとことばの連歌としての『おふでさき』のなかに籠められた、独自かつ普遍的な宗教思想・哲学を抽出しようとするところみは、和辻氏の期待にいささかなりともそう契機となり、吉本隆明の問題に応答する種まきになるかもしれないというのが拙論の目指すところであった。

和辻氏の「日本語をもって思索する哲学」の試みが、これまでのどんな「哲学」にも属さない「未知の泥海」へと通じているのを垣間見たに相違ないと述べ、「日本語をもって思索する哲学者よ、生まれいでよ」という、このしめくりの言葉には、一抹の苦さが含まれているとの理由を、長谷川三千子は和辻の探求の道筋を解説しながら『日本語の哲学へ』において詳しく述べている。日本語をもって思索する哲学を構築するために、あまたある「和辻神話」のなかで包括的に秀逸なテキストの一冊は、現在フランス国立東洋言語文化大学日本学部でフランス人に日本語を教授し、日本人が哲学的思考を行うことを射程に論理学、日本語論、日本語文法論をまとめている浅利誠著の力作『日本語と日本思想—本居宣長・西田幾多郎・三上章・柄谷行人』（藤原書店、2008年）であろう。哲学、民俗学、史学、文学、翻訳論、言語学などの関係学者の諸説を縦横に紹介・批判、あるいは評価し、和辻のハイデッガー解読の深淺にも自説を開陳している。

浅利誠は、いわゆる「和辻神話」を解説するに際して、和辻の哲学的日本語論を、「存在」と「こと」という2語の検討を通して、ハイデッガーとの関係において問題にしている。和辻がハイデッガーに接近するのは、「[存在]の意味は動詞的なものとして捉えるべきなのに、「ザイン」という名詞を通して存在の意味を問うことによって、存在の肝心の次元（審級）を取り逃がすことになる」というのが浅利の中心的論点であった。氏は和辻がハイデッガーが『形而上学入門』の第2章の中で展開している論究を推測することさえできなかったにもかかわらず、問題の核心を射抜く直観力はそなえていたのではないかという、長谷川三千子が直感したことと同じ意味のことを述べている。くわえて、「和辻が掲げた目標を、〈日本語を通して西洋の形而上学＝存在論の限界を突破しようとしたらそれは何か〉と言いうとしたら、そこにあるもっとも重要なポイントは、まさに日本語の「こと」に注目することだったのである」と述べ、さ

らにくわえて、このことがいかに大きな刺激を与える事になったかについては、注（1）を参照願いたいとあり、その注には3頁にわたって、坂部恵、廣松渉、木村敏、柄谷行人の議論の関係性の中で、彼らの見解を紹介・分析、批判ないし評価をしている。つまり、浅利は和辻の「日本語と哲学の問題」という論考は、「本居宣長の言語論に遡行させる戦略を明瞭に抱え込みながら、ハイデッガーとの比較へと私たちを誘い込んでいのように思えるのである」と述べ、その注においても、このテキストが、廣松渉の『もの・こと・ことば』への省察の源泉であることは疑いない。同時にまた、宣長「コト（出来事）・言（言葉）」を念頭においていると見て間違いないと断定し、東京大学教授の廣松渉（1933～1994）が和辻思想から直接的な影響力をうけたことを記している。この問題については、しかし、哲学思想の核心を求めて未知のジャングルの冒険に素手でいりこむような予感がして、わたくしにここでいま詳しく総合的に解説する時間も力量もない。和辻の課題に関しては、柳父章著の「モノ中心の哲学とコト中心の哲学」（翻訳の世界選書・『比較日本語論』）なども必読の書であるが、後ほど稿をあらたにしてスペースがあれば触れることにする。

あきらかに和辻の影響を受け「近代的世界観」にかわるあたらしい世界観の構築を目指して、廣松渉は、関連論文をまとめて『事的世界観への前哨』（勁草書房、1975年）なる哲学書を世に問うた。この書のサブタイトルには「物象化論の認識的＝存在論的位相」とあり、廣松の事的哲学書は時を経るにしたがって漢語表現がむやみやたらに多くなり、読むにたえない表現に凝縮していく。長谷川三千子が前出著書巻末の「補注」で、廣松氏のよく知られている著書『もの・こと・ことば』は「役に立つよりは邪魔になる。一口に言えば、そこには言葉より自分の方がエライのだ、と言う傲慢さがある」。そしてよく引用される廣松の「〈もの・こと論〉は……こんな風に論じてはいけない、というお手本としてのみ読むべきものであろう」と切り捨てている。

その廣松渉が『仏教と事的世界観』（朝日出版社・エピステーメ叢書、昭和50年）というタイトルのもと、インド哲学専攻の大正大学教授・吉田宏哲師との哲学と宗教思想の接点を模索・議論した対話・討論形式の共著を出版している。両者の討論は2部構成からなっており、第1部は「科学の危機と〈無の哲学〉」と題して、無我、縁起、唯識、真言を語り、第2部は「事的世界観と〈般若〉の思想」と題して、般若、菩薩をキータムとして取り上げている。巻末には吉田の〈あとがきにかえて〉・「仏教における存在論と認識論」が論じられているが、この対論もこのようにして論じてはいけないかどうかは読者の解釈にゆだねるしかないであろう。というわたくしの理由の一つは「事的世界観と天理思想」という問題意識が、すくなくとも『仏教と事的世界観』から得られたことは確かであるからである。